

ふるきとの史跡散歩

藤崎町

昨年5月、町郷土史会では公民館と共催で、「藤崎町常盤地域の史跡を訪ねる会」を開催し、また、一昨年は同じ時期に、藤崎町の大字藤崎地域の「史跡を訪ねる会」を開催して、非常に有意義でした。

郷土には、たくさんの神社や、郷土の産業や寺院や文化の面で意義の高い場所がたくさんあります。そんな場所を訪ね、往時の人たちの思いにふれることは、私たちの生活の中で大きな意味のあることだ…、そんな思いを新たにしました。そこで今回、郷土の史跡の主なもの小冊子にまとめてみたいと願ったのが、この冊子です。

内容は、2回の史跡探訪の会やこれまでのいろいろな蓄積、「藤崎町誌」「常盤村史」「常盤村文化財資料・神社仏閣編」「水木館遺跡調査報告書」などの文献、数度の現地踏査などによるものです。

知識の浅さや土地勘のなさ、調査の甘さ、紙数の制限などから、その土地の方の思いに合わない箇所も多いと思いますが、とりあえず町全域を俯瞰できたということに免じてお許しいただきたいと存じます。

町村合併で新しい藤崎町が誕生しました。合併は決して過去を捨て去ることではなく、郷土のこれまでの営みや蓄積を肥やしにして、新しい地域づくりを進めることだと考えます。今回、そんな思いを強くした次第です。

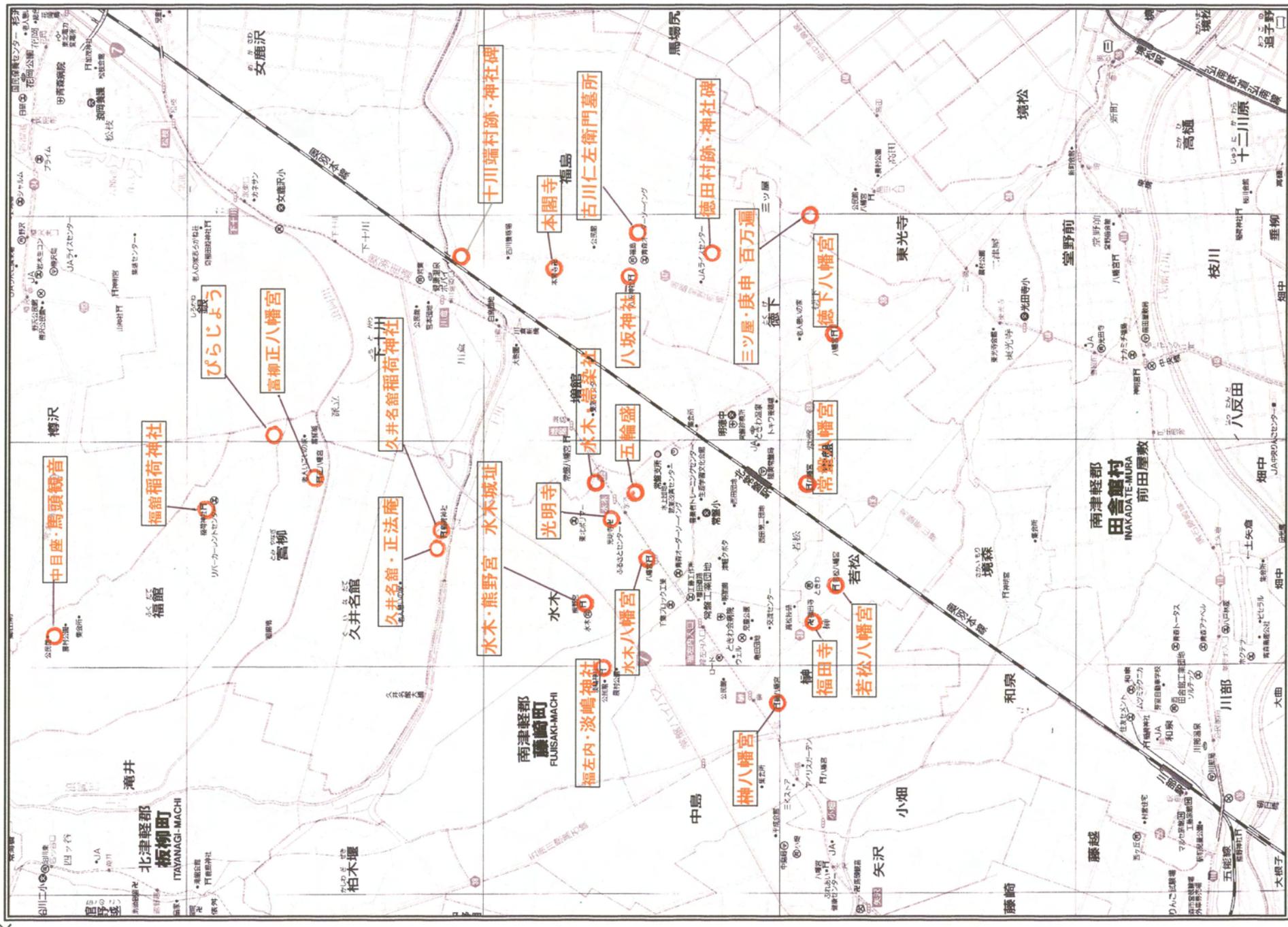
平成19年2月

藤崎町郷土史会 小笠原 睦男

目次 (紹介する史跡)

- 藤崎八幡宮…(5) ○稱名寺…(6) ○心光寺…(7)
 - 眞蓮寺…(8) ○藤崎城址…(9) ○法光寺…(11)
 - 富士神社…(12) ○日本キリスト教団藤崎教会…(13)
 - 稲荷神社…(14) ○白鳥飛来地…(15) ○攝取院…(16)
 - 保食神社…(17) ○農林省試験場跡・ふじ発祥の地…(18)
 - 唐糸御前史跡公園…(19) ○鷹待場跡…(20) ○堰神社…(21)
 - 鹿島神社…(22) ○昭傳寺…(23) ○藤越・鹿嶋神社…(24)
 - 林崎・荒磯崎神社…(25) ○中島・小畑 八幡宮…(26)
 - 矢沢・正八幡宮…(27) ○水沼・保食神社…(28)
 - 中野目惣染宮…(29) ○智園寺…(30) ○西中野目八幡宮…(31)
 - 柏木堰・崇染宮(32) ○榊八幡宮…(33) ○福田寺…(34)
 - 若松八幡宮…(35) ○常盤八幡宮…(36)
 - 徳下八幡宮・イチイの古木…(37) ○福島・八坂神社…(38)
 - 徳田村跡・稲荷神社跡碑…(40) ○十川端村跡・稲荷神社跡碑…(40)
 - 福島・本閼寺…(41) ○五輪盛…(42) ○水木・崇染社…(42)
 - 水木・光明寺…(43) ○水木・八幡宮…(44) ○水木・熊野宮…(45)
 - 水木城址…(46) ○福左内・淡嶋神社…(47)
 - 久井名館・稲荷神社…(48) ○久井名館・正法庵…(49)
 - 富柳・正八幡宮…(50) ○福館稲荷神社…(51)
- (いろいろな祈りの場所など)
- 白子の庚申…(52) ○林崎の馬頭観音…(52) ○林崎の庚申…(53)
 - 矢沢の馬頭観音…(53) ○中野目・天岩戸櫻谷神社…(53)
 - 俵舂・庚申塚と百万遍…(54) ○三ツ屋の庚申塚と百万遍…(54)
 - ぴらじょう…(55) ○中目座・馬頭観音(56)
- (いろいろな金石文)

史跡の位置図(2)



藤崎八幡宮

藤崎八幡宮は、寛治6年（1092年・平安時代）に藤崎城が完成した時、領内の鎮守として創設されたと伝えられています。社殿は藤崎城の土塁の斜面にあり、祀られているのは、一般的に八幡宮に祀られている「品陀別命」（ほんだわけのみこと・第15代応神皇）ですが、ほかに淡島宮や天満宮などの社もあります。



写真
上から
八幡宮の社殿
裏手の土塁と
堀の跡
暦応3年の
板碑



土塁上には、暦応3年（1340年）の板碑（近くの稱名寺の境内から出土したといわれる）、明治14年（1881年）に建てられた「安東氏顛末記」（当時の知識で得られた安東氏や藤崎城の物語が刻まれている）、庚申塔、二十三夜塔などがあります。

藤崎八幡宮は、鹿島神社と並んで藤崎地方を代表する大きな神社として人々から崇敬を集め、戦争が進められた時代にはその祈願祭などが盛んに行われるなど、地域の人たちのよりどころとなりました。

社殿のある長い土塁とその下の堀跡は、その昔藤崎城を拠点に活躍した安東氏と藤崎城の壮大さを現在に伝える貴重な大切な遺構であるといえます。

稱名寺

稱名寺（しょうみょうじ）は、「八幡山」の山号を持つ、浄土真宗大谷派の寺院です。寺の開基は、江戸時代の延宝3年（1675年）



とされますが、藤崎町所蔵の天和の絵（1683年）には「念仏堂」と記されています。

本尊の阿弥陀来像は、作者は不明ですが、古今の名作といわれ、寺号とともに本山から賜ったといわれます。



稱名寺と、墓地にある板碑
一戸玉吉の記念碑



寺院がある場所は藤崎城の外郭の南側の端の河岸段丘の上にあたり、八幡宮と向かい合っている位置関係などからも、この寺院は、安東氏が活動した中世からあったのでは…とする識者もあります。

稱名寺の前の道路は、江戸時代からの重要幹線「羽州街道」で、付近の鍵方に複雑に曲がる道路は、中世の道路の特徴とも言われています。昔の本通りは今の国道ではなく、裏側のこの道筋であったわけで、道幅などは当時と殆ど変わっていません。

お寺の墓地には、近くの道路端にあったとされる板碑（年不詳）や、軍艦に乗務し一身を犠牲にして大事故から艦を救った一戸玉吉の記念碑（墓）などがあります。

心光寺

大字藤崎字村岡・通称 仲町にある心光寺（しんこうじ）は、紫雲山の山号を持つ浄土真宗西本願寺派に所属する寺院で、本尊は阿弥陀如来です。

明治時代のことですが、近くの稱名寺の内部で紛争が起こり、そのため明治 25 年（1892 年）に浄土真宗大谷派から別れ、西本願寺の本派本願寺直轄説教所となりましたが、後に本願寺藤崎説教所となり、昭和 25 年に浄土真宗東北地区青森組に編入されました。

青森県は、浄土真宗西本願寺派の寺院は珍しいのですが、心光寺は「お西さん」と呼ばれ、門徒から慕われています。

寺宝の本尊・阿弥陀如来像は、越中の国（富山県）の名刹から拝領したもので、分派した当時の熱心な門徒の献身的な奉仕によって、徒歩で越中から運ばれ安置されたといわれています。

お寺に続く梨の木共同墓地には、キリスト教や神道などの人達のお墓も多く、藤崎の近代史上著名な人達も数多く葬られています。心光寺の境内一帯は、小高くなっており、八幡宮から続く藤崎城の土塁跡で、近年藤崎城跡としては最初の発掘調査が行われています。



心光寺の正面

眞蓮寺



大字藤崎字村岡にある「眞蓮寺（しんれんじ）」は宝池山の山号を持つ浄土真宗大谷派の寺院です。本尊は阿弥陀如来で、延宝 4 年（1676 年）の開基とも、天文元年（1532 年）の開基とも伝えられていますが、天和 4 年の絵図には、「念仏堂」と書かれています。



眞蓮寺と山門の裏側

寺院の位置は、藤崎城の外郭の土塁と堀が主郭（本丸）の方向に直角に折れる角の場所にあたり、藤崎城と関連をうかがわせませす。

また、眞蓮寺の山門は、地方の寺院にはにつかわしくないくらい太く頑丈な柱が使われ、その柱には重い扉を吊り下げたような金具が取り付けられています。この山門は大浦城（津軽氏のかつての居城）の裏門を移築したものだと伝えられています。

江戸時代、眞蓮寺の住職には文化人が多く、江戸末期天明の飢饉の頃、菅江真澄が藤崎を訪れここに宿泊した記録が残されています。

また、寺の境内にはかつて近くの平川の堤防の上にあった「水難供養碑」が安置されています。

藤崎城址

遠い昔の平安時代、「前九年の役」と呼ばれる11年にも及ぶ熾烈な戦いがありました。その戦いで、中央からの派遣された源頼義・義家の軍に破れて滅んだ奥州安倍氏の頭領・安倍貞任（あべさだとう）の次男の高星丸（たかあきまる）が乳母に抱かれて藤崎に逃れ、やがて成人して藤崎城を築き、安東氏を名乗って大いに栄えたといわれます。藤崎城の築城は、寛治6年（1092年）とも永保2年（1082年）ともいわれています。

安東氏や藤崎城の築城経過などについては、発掘成果や文書などによる確認が十分ではありませんが、東北各地の城跡などの遺構や伝承、他の地域の文書・史料

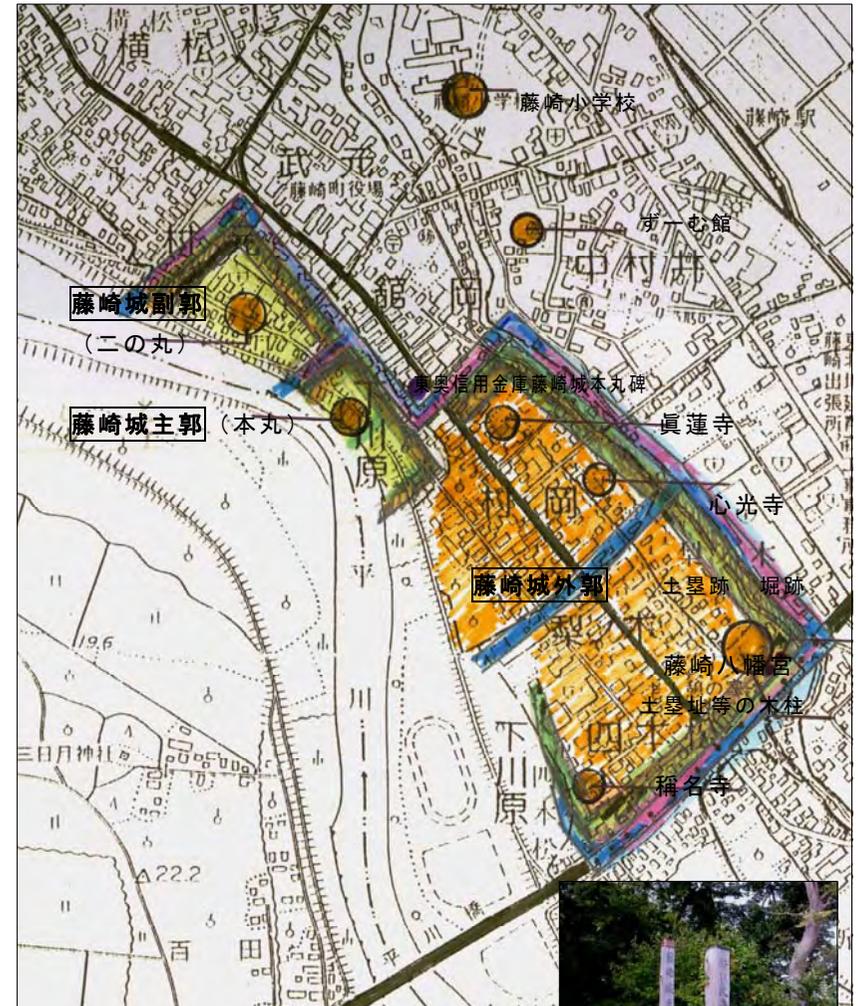


藤崎城を描いた天和4年の絵図（部分）、藤崎城が廃止されてから100年くらい後の様子が描かれている

などから、安東氏発祥の地が藤崎で、当時としてはかなり規模の大きい藤崎城を拠点に大いに栄え、日本の中央の動きとも強く関連しながら活躍したということは、東北の古代史上定説といえるということです。

安東氏は、1400年代の中頃までには南部氏に追われ、秋田地方で新たな時代を築くことになりましたが、藤崎城はその後も城としての機能を保ち続け、南部氏の津軽支配の拠点としてなり、南部氏が津軽から撤退した後は、津軽為信のものとなって、為信の縁者が住みました。藤崎城が廃止されたのは、天正年間（1500年代・安土桃山時代の終わり頃）の頃と推測されます。

藤崎城址の配置などは図の通りですが、特徴として非常に大きな外郭（そとぐるわ・土塁や堀があり、下級の家来や一般民衆が住所）が形成されていること、大河の合流点の河岸段丘に位置していることなどがあげられています。



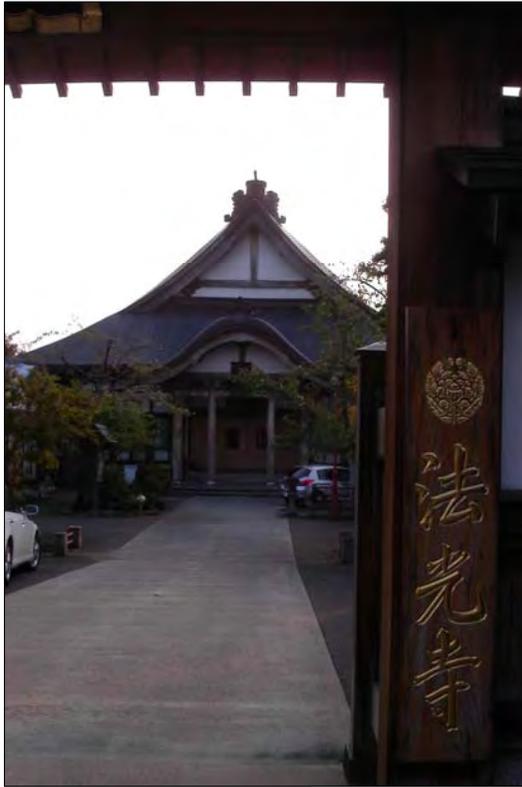
現在の地図でみる藤崎城の範囲・配置
国道7号バイパス沿いの城址と土塁跡と
安東氏発祥の碑



法光寺

大字藤崎字村元にある「法光寺（ほうこうじ）」は、「梅田山」の山号を持つ日蓮宗の寺院です。本尊は「十界曼荼羅」ですが、寺宝として「鬼子母神像」を安置しています。

法光寺は、寛文 12 年（1672 年）に梅田村（五所川原市梅田）に創建された寺院が前身で、元禄時代の末頃水害や飢饉で衰微していた寺院を藤崎の宗徒の願いによってこの地に移転したものとされます。



法光寺

また、寺宝の鬼子母神については、このような物語が伝えられています。江戸時代末期の天明の飢饉の頃、この寺が廃寺同様に衰微していたのを、弘前に住む熱心な門徒であった竹屋（小宮山）太兵衛夫妻が再興を志し、本山の本満寺に訴え、近衛家守護の鬼子母神像を授けられて帰国しました。そして寝食を忘れて寺院再興に尽くし、七年後の寛政七年によくそれを安置することができました。小宮山夫妻はその功績で法光寺十二世に加えられています。

法光寺では、毎年 2 回、鬼子母神像の開帳が行われ、この日は藤崎で最初と最後の宵宮が開かれ、大いににぎわいます。

富士神社

藤崎保育所や藤崎駅に近い大字藤崎字中村井に、「富士神社」があります。神社に祀られている神様は、木花之佐久夜毘売（このはなさくやひめ・我が国の神話に登場する美しい女神で、オオヤマツミノカミの娘、ニニギノミコトの妻）です。

富士神社は、江戸時代の中頃の明和 9 年（1772 年）に毘沙門宮（現在の鹿島神社）の末社としてお堂が建てられ、木挽町の産土神として祀られたのが、始まりだと伝えられています。由来には、毘沙門宮の宮司の小笠原円之太夫の祖母が、夢の中で神託を受け、土中から金銅の神様を見つけたことから、村の人達がそれを祀ったという話が伝えられています。

神社は、江戸時代には富士権現を祀っていましたが、明治初年の神仏分離の際に鹿島神社に合祀された後、大正 2 年（1923 年）に分離し、字西村井（現在の都市計画道路沿い・りんご加工工場入口付近）にお堂が建てられました。現在地に移転したのは昭和 29 年、都市計画道路の工事に伴う移転でした。境内には、昭和 9 年に建てられた庚申塔があります。



富士神社

日本キリスト教団藤崎教会

津軽では、明治初年に旧弘前藩の藩校であった「稽古館」が、「東奥義塾」として再興され、外国語教師としてキリスト教の宣教師を迎えました。そのこともあって、弘前地方には早い時代からキリスト教が布教されました。



藤崎駅通りにあるキリスト教会

また、津軽では明治維新に際して、士族の帰農政策の一環として武士を農村に在宅させる制度が進められました。東奥義塾が再興された後、その塾頭を務める本多庸一の家族が藤崎に在宅し、藤崎は弘前と並んで早い時期にキリスト教と出会うことになったのです。

藤崎村に最初に牧師が派遣され、講義所が開かれたのは明治 19 年 12 月（1886 年）、翌年には字武元の以前町役場があった場所の隣地に最初の教会堂が建てられました。そして、現在地の藤崎駅通りに教会堂ができたのは大正 14 年（1925 年）のことです。

藤崎での初期のキリスト教布教の活動は、本多庸一の影響が大きいですといわれますが、盲目の牧師として名をはせた藤田匡、リンゴ産業の先駆である敬業社の中心となった佐藤勝三郎、同じ敬業社の同士で実業家の長谷川誠三などの指導者がキリスト教に入信しました。そして、キリスト教や教会の関係者の活動は、藤崎の教育や産業に大きな影響を残しています。

また、藤崎の最初の保育園は、昭和 23 年に町の委託によってキリスト教会に併設されたのがその発端で、教会には現在も幼稚園が併設されています。

稲荷神社

大字藤崎字村元・通称館川町にある稲荷神社の場所は、西館と呼ばれる藤崎城の副郭にあたり、藤崎城の西の丸の守り神として祀られ、その後農業の神様である稲荷宮・宇賀之魂命（うがのみたまのみこと）が祀られるようになったといわれています。神社の位置は平川の岸で、江戸時代は神社の下流側に藩の年貢米の集積基地である「御蔵・役蔵」（幅 3 間・長さが 20 間くらいの倉庫 3 棟と事務所兼休憩所のような施設が川に面して四角形に配置されていた）が設けられ、付近は人馬の往来と米を積み出す船で賑わったものと思われます。

稲荷神社は、明治初年の神仏分離の際に一時伝馬の鹿島神社に合祀されましたが、間もなく再び現在地に移されました。近年は平川右岸の整備工事に伴って境内に中で移築され、往時より敷地も狭く違



現在の稲荷神社と、藩の米穀集積基地の御蔵が描かれた幕末頃の絵図



った雰囲気になっています。また、同じ境内には、近年町内のオンラ様のお堂があり、さらに町の文化財に指定されている建武元年（1334 年）の「板碑」があります。

白鳥飛来地



藤崎の平川に、いつから白鳥が翼を休めるようになったかは定かではありませんが、冬の期間を通してたくさんの白鳥がいつもこの水域にいるようになったのは、昭和43年頃からのようです。その当時野生の白鳥の餌付けに成功した例が全国的にも珍しく、全国から問い合わせがあったものでした。

白鳥が群れ遊ぶこの場所・五所川原堰などに農業用水を流し込むための平川の留め切りが生んだ巨大な人造湖のような水域に岩木山が映える秀麗なパノラマは、津軽の冬を代表する風物詩となり、いつもたくさんの人達が訪れています。そのかげには、白鳥をかけがえのないものとして大切にしてきた無数の人達の努力や思いがありました。この水域の白鳥は、県と町から「天然記念物」の指定を受けています。またここは、白鳥だけでなくたくさんの水鳥たちの楽園で、無数のカモの仲間や、時には、オジロワシ・コクチョウ・ハクガンなどといった珍しい鳥たちが姿をみせることもあり、話題を呼んでいます。

攝取院

大字藤崎字村元・通称下町にある攝取院は、「金光山」の山号をもつ浄土宗の寺院です。本尊は、阿弥陀如来。平安時代の末、浄土宗を開いた法然上人の高弟である金光上人が奥州の布教を志し、藤崎村の法輪丘にあった大きな松の根元の穴に寝起きして布教に当たったという言い伝えが残っています。建保5年(1217年)に金光上人が死去し(墓所は浪岡にあります)、上人ゆかりの法輪丘に施主堂を建て、上人の遺髪と法衣を納めたのが、攝取院の始まりだと伝えられています。

戦前の文献には、攝取院には、藤崎の名所として飛龍の松と呼ばれる巨大な松の古木があると記され、お寺にもそれらしい巨大な松とともに写された記念写真が残されています。お寺の境内には、正和元年(1321年)の板碑があり、裏手の墓地には、藤崎町の近代史の中で輝いているたくさんの指導者の人達が眠っています。



攝取院と 境内の正和元年の板



保食神社

大字藤崎字一本柳・通称下町にある保食神社（うけもちじんじゃ）には農業の神様である「保食神」（うけもちのかみ・宇賀之魂命・うがのみたまのみこと…）が祀られています。

この神社には、源義経の乗馬がこの地で死んだのを祀ったという伝説（源義経の北行伝説）、唐糸御前を探しに来た北条時頼の家来の馬が倒れた場所だという伝説などが伝えられています。また、江戸時代末期にこの地を訪れた文人・菅江真澄の「つがろのおち」には、この神社だと思われる「うまの神」という絵が紹介されています。

この神社が保食神社としてこの地に建てられたのは大正時代のことです。それ以前は、現在地の向かい側の村外れにあり、馬頭観音を祀る土産神として信仰され、「鞍森（くらもり）」と呼ばれていたということです。

境内には、馬頭観音の石碑や、町内の青年団体の記念碑などがあります。



保食神社と
菅江真澄が残した「うまの神」の絵

農林省試験場跡・ふじ発祥の地

現在世界で一番生産量が多いりんごは「ふじ」です。「ふじ」が生まれた所が、

藤崎にあった農林省園芸試験場東北支場

（間もなく組織替えて東北農業試験場園芸部となる）です。園芸試験場は、昭和

13年（1938年）に、二転

三転の末にこの地・字下袋の土地の極めて肥沃な場所に誘致されましたが、その後大戦・終戦を挟んで昭和37年の早春、盛岡市の国立試験場に移転統合されました。跡地には現在、弘前大学農場、藤崎園芸高校・藤崎町営住宅などが整備されています。

ふじは、国光という品種の花にデリシャスという品種の花粉を交配して実ったりんごの種を植えて、小さな木（実生）が作られ、その中から選ばれた品種です。試験場全体のりんごの交配の組合せは42種類、生まれた実生は4,600本余り、後に「ふじ」となる東北7号が最初に実をつけたのが昭和26年のことだといわれます。「ふじ」という世界一のりんごができたのは、幾つかの偶然に恵まれながらの気が遠くなるような長い作業の末の、奇跡に近いことだといわれます。「ふじ」という名前は“誕生地の藤崎と名峰・富士山”にあやかっ命名されたということです。

藤崎に誘致されたこの試験場は、あまりにも有名な「ふじ」の育成だけでなく、白菜など寒冷地の野菜の開発や、りんごの高接病やりんごの生理・栄養管理など、目覚ましい研究成果をあげています。



かつての試験場の庁舎、前庭にリンゴの栄養生理の研究のための水耕栽培のポットが見える

唐糸御前史跡公園

藤崎町の板柳町飯田に近い町外れに「唐糸御前史跡公園」があります。

鎌倉時代、第五代執権の北条時頼に愛された唐糸御前が、周囲の妬みを受けて鎌倉を去って故郷の藤崎に落ち延び、平等教院という寺の庇護を受けていましたが、やがて時頼が津軽に来て再開することを悲しみ、近くの沼に身を投げて自殺したという物語・「唐糸御前の伝説」を伝える所です。この伝説は、津軽氏が大切にし、自らの系図の中で、唐糸御前を津軽氏発祥の部分に位置づけました。

平成5年、この伝説の地に「唐糸御前史跡公園」が完成しました。昔からこの地にあった、津軽では有名な延文4年(1358年)の板碑、五輪塔、明治時代の伝説の碑、大きなセンの木の古木、別に最近発見された板碑などがある部分そのまま確保されており、さらに広々とした公園が整備されています。

公園から西側に見える巨大な松のある「藤崎町斎場」が、唐糸御前が庇護を受け御前の死後その菩提を弔ったとされる平等教院(後に霊台寺・護国寺・満蔵寺と名を変え、鎌倉文化が津軽に伝播される時のセンター的な役割を果たしたのではないかとされる寺院)、後に弘前の長勝寺構(ちょうしょうじがまえ)が造られた時に移された「満蔵寺」の跡です。



唐糸御前史跡公園と内部にある延文の板碑

鷹待場跡

江戸時代の頃、幕府の要人や藩主など上級武士の権力の象徴とも言えるものの一つに、「鷹狩」がありました。そして、鷹待場・鷹待(たかまち)というのは、その鷹狩用の鷹を捕らえるための場所・施設のことです。

津軽は鷹の名産地として全国に知られており、やがて津軽藩は、鷹狩用に調教した鷹を幕府の要人たちなどに献上することを年中行事にするようになりました。そのようなことから、津軽藩の領内で城下にも近く、平川や岩木川が合流する一帯・真那板付近の原生林を鷹待場に指定し、一切の開発を禁止しました。面積は平川と岩木川本流の合流点を中心に、100ヘクタール以上にもなります。その場所は、明治維新まで、城下や村落に近い極めて肥沃な川原地の手付かずの原生林という特殊な状態のまま残ったのです。

明治に入り、米を作るという絶対的な農業の枠組みがなくなると、水田開発がなされないまま残っていたこの地域は、原生林の大木が切り払われた後やがて農民の手に渡り、藍・野菜類・馬鈴薯そしてリンゴといった畑作園芸が爆発的に発達する場所となったのです。このあたりは、現在は一面のリンゴ園になっています。鷹待場の存在は、藤崎の近代農業の上で、極めて重要であったといえます。

なお、良い鷹が捕らえた場所としては、この一帯だけでなく、藤崎の近くでは滝井林といった十川の流域などもあげられ、このあたりでは今でも鷹をよく見かけます。



「みずべの学習ひろば」から見た鷹待場があったあたりと、付近を描いた江戸時代の絵図

堰神社

大字藤崎字横松・通称新町にある「堰神社」は、江戸時代初めの慶長14年（1609年）、浅瀬石川から幹線水路である藤崎堰に用水を引き入れる水口の堰根（せきこん・川

の水位を上げるための留め切り）を完成させるために、自らの命を犠牲にして「人柱」とな

った、堰八太郎左衛門安高（せきはちたろうざえもんやすたか）の霊を祀る神社です。神社は正保2年（1645年）津軽藩の手で創建されました。後に、堰神社は水下の農家からの上納金で運営されるようになり、水利の守り神様として信仰を集め、神主は代々、太郎左衛門の子孫が務めています。

神社境内には、太郎左衛門の200年祭に当たる文化後年（1808年）に建てられた「堰神社祠碑」のほか、庚申塔、農業水利や開田関係の石碑、樹齢400年以上という藤崎町最大級の大銀杏、そして社殿には太郎左衛門が人柱になる場面を描いた絵（昭和29年・ねぶたの作家としても知られる日本画家・石澤龍峽の作）などがあります。

また、同じ境内に、付近の町内・新町の産土神で、天照大神を祀る「神明宮」があります。神明宮には、子どもの狛犬（こまいぬ）にそっと前足をかけている狛犬がおり、思わず微笑みたくなります。



堰神社と、社殿にある石澤龍峽が描いた人柱の場面を描いた絵馬



鹿島神社

通称伝馬・大字藤崎字若前にある鹿島神社は、藤崎八幡宮と並ぶ藤崎地方を代表する神社で、昔は付近一帯が大林（おおばやし）と呼ばれる巨大な

林であったといわれ、神仏分離以前は、「毘沙門」と呼ばれていました。祀られて

いる神様は、武甕槌神（たけみかづちのかみ・鹿島神社に一般的に祀られている天孫降臨に関わる伝説の神様）ですが、本殿には荒磯前神社や愛宕神社も合わせて祀られ、ほかに坂上田村麻呂神霊などたくさんの神様が合祀されています。

神社の由来は、平安時代初め坂上田村麻呂の蝦夷征伐の際、蝦夷の頭領・恵美の高丸の霊を退治した時、田村麻呂の守護神である毘沙門を祀ったのが始まりといわれます。そして、その時、田村麻呂が地面に突き立てた藤の杖（または「むち」）から枝や根がのび、付近を“藤の咲く里・「藤咲村」と呼ぶようになったという、「藤崎」の町名の由来にもなった伝説の場所でもあります。

神社の境内には、神社碑、忠魂碑や平和祈願碑など戦争に関する石碑、名大関大ノ里など相撲関係の顕彰碑、庚申塔など多くの金石文や、藤崎町が管理する相撲場などがあります。



鹿島神社と、境内にある町の相撲場その正面には名大関大ノ里の顕彰碑がある



昭傳寺

大字藤崎字西村井にある昭傳寺は、「龍松山」の山号を持つ曹洞宗の寺院です。本尊は釈迦牟尼佛です。

昭傳寺は、明治26年に泰嶽佑禪師（後に弘前・隣松寺の三十一世）がこの地を見込んで托鉢して浄財を集め、説教所を開いたこと由来するとされます。その後何人かの先人が教化にあたりましたが、昭和23年に寺格が認められています。そして平成2年に現在の本堂が建立され、移転しました。

昭傳寺の墓地には、近くの鹿島神社付近から出土した巨大な五輪塔や、天明の飢饉の犠牲者のものと思われる墓、地藏堂などがあります。

また、明治維新直前の明治3年の藤崎村の分限図には、耕地としては小さすぎる8畝余の「革秀寺知行地」が書かれています。初代藩主の津軽為信をまつる弘前市藤代の革秀寺の開基は、為信の師でもあり長勝寺の八世を務めた格翁という高僧ですが、為信の義父の為則の葬儀の後に藤崎に庵をむすんだとされています。その場所・革秀寺発端の場所がここではなかったのかと憶測されます。



昭傳寺と、墓地の境内ある巨大な五輪塔

藤越 鹿嶋神社

大字藤越にある神社が鹿嶋神社です。鹿嶋神社に祀られている神様は武甕槌神（たけみかづちのかみ）です。



鹿嶋神社と、藤越の由来などを刻んだ石碑



慶長元年（1596年）、現在地より東側の字東一本木にお堂が建てられ、藤崎村の毘沙門宮（鹿島神社）の分霊を祀って鎮守としたのがこの神社の始まりとされます。そして明治21年（1881年）お堂が火災で焼失し、その後現在の字西一本木に移転しました。

藤越は昔「田中菴」と呼ばれる湿地帯でした。慶長年間、細越村（現在は青森市）で開拓に励んでいた木村弥太衛門ら3人の夢枕に鹿嶋神が現れて、「田中菴を開拓せよ…」と告げました。3人は勇んで開拓を進め、その土地は立派な耕地になったのでした。その時、藤崎村の毘沙門宮の神木の藤の木から一夜にして根や枝葉が伸び田中菴に至ったので、この地を「藤越」と改め、神社を創建したということです。境内には、木村弥太衛門の子孫で藤崎の指導者として活躍した木村謙一氏が建立したものを、謙一氏の孫の木村守男氏が再建した「藤越の由来記」の碑・馬の碑・庚申塔などがあります。

林崎 荒磯崎神社

大字林崎字宮本にある「荒磯崎神社」(あらいそぎきじんじゃ)は、江戸時代初め頃の寛永 11 年(1634 年)に創建されたと伝えられています。その頃は薬師堂で、飛龍権現を合祀していたといわれます。その後、明治 3 年の神仏分離の際に、闇靄神社(くらおうじんじゃ)となり、間もなく現在の荒磯崎神社となったようです。荒磯崎神社には、少彦名命(すくなびこなのみこと・記紀に登場する温泉・医療の神様)と大己貴命(おうなむちのみこと・大国主命)が祀られています。

荒磯崎神社にはこんな興味深い伝説が伝えられています。社殿に乞食が泊まり込み、ご神体を盗み出し、それがいつの間にか下北の恐山に納められていました。恐山には林崎神社という祠があり、そのご神体はいつの間にか林崎の方角を向いているのですが、そのご神体を林崎の人達が取り返しに行くと必ず風雨になるといいます。また荒磯崎神社の神様は、ウドで目をついて怪我をしたことがあるため、昔、村の人達は決してウドを食べなかったそうです。

五能線の線路に近い村外れの神社の境内には、大きな庚申塔(猿田彦大神)が 2 基あります。



荒磯崎神社と境内にある大きな庚申塔

中島・小畑 八幡宮

大字中島と小畑の八幡宮は、明治 8 年

(1875 年)に、矢沢の正八幡宮の遥拝所(離れた



場所から神社などを拝む場所)として分離したのが始まりだといわれています。



中島小畑八幡宮と、境内にある小さな庚申塔・力試し石

第二次世界大戦の前は、

中島と小畑は、「中小(なかこ)」と呼ばれ、一つの単位として活動していました。この八幡宮が「中小」の神社として正八幡宮から分離するに当たっては、川部の熊野宮の奥の院のお堂を譲り受け、さらに、村の南側の赤沼のほとりにあった薬師様も合祀して、新しい神社として建立されました。

現在八幡宮に祀られている神様は、誉田別命(ほむたわけのみこと・応神天皇)と八幡太郎義家(はちまんとろうよしいえ)です。

神社の境内には、2 基の庚申塔、地元の相撲力士の顕彰碑、地元の若者たちが力自慢を競ったであろう「力試し石」などがあります。

また八幡宮の社前には普通の狛犬と並んで「鳩の石像」があります。

矢沢 正八幡宮



小さな
お堂や
石塔
矢沢
正八幡
宮と
境内
の

大字矢沢の正八幡宮の縁起については、二つの物語が伝えられています。一つは、大同年間（806～810年）、坂上田村麻呂が蝦夷の頭領・高丸を射殺した際、その矢を修験の僧・明円に与え、正八幡宮を祀って「矢沢山勝軍寺」を建立したという伝説（新撰陸奥国史）、弘藩明治一統誌では、それを延暦3年（784年）のこととし、沼洲村（藤崎村）の近くの赤沼に高丸の遺骸を埋め、矢は正八幡宮のご神体として崇敬したというもの。もう一つは、元和元年（1615年）、弘前の広田三郎左衛門という人が、小畑の三本木から異体の仏像を発見し、それを祀って矢沢村の氏神として崇敬したというものです。

正八幡宮は、昔はもっと藤越寄りの赤沼の方にあったと伝えられています。祭られている神様は、一般的な八幡宮と同じ誉田別命（ほむたわけのみこと・応神天皇）です。

江戸時代末にこの地を訪れた菅江真澄は、正八幡宮の印象的な松の風情を紀行文と和歌に残しており、正八幡宮は昔からこの地方を代表する神社だったようです。

また、昭和30年に十二里村と藤崎町が合併するまでは、境内の隣地に十二里村役場がありました。

水沼 保食神社

大字水沼の保食神社（うけもちじんじゃ）には、保食神（うけもちのかみ・別名「倉稻魂命」・水稻の神様）が祀られています。神社の創立年代は不明ですが、延宝年間（1673～1681年）には、観音堂を建立して惣染宮（そうぜんぐう）と呼ばれていたと伝えられています。そして、明治3年の神仏分離の際に、氏子が相談し、神社の名前を「保食神社」と改め、祭神も産業・農業の神様である倉稻魂命（うけのみたまのみこと・稻荷様と同じ神様）を祀り、さらに風神様を合祀したと伝えられています。

境内には、江戸時代の道路の案内標識とも言うべき「追分石」（藤崎中学校の通りと国道7号旧道の交差点付近にあった）、三面六臂（顔が三つ、腕が六本の像）の馬頭観音、江戸時代末・天保年間の庚申塔などがあります。



水沼 保食神社と
三面六臂の馬頭観
音の石像、追分石

中野目 惣染宮

大字中野目字東早稲田、中野目の集落の西側に、馬頭観音を祀る惣染宮があります。

中野目村には「三間と四間の観音堂地があり、元禄二年（1689年）に神職の長利太夫が勧請してお堂を建て、観音を祀った…」という内容の古い記録があります。そして、貞享4年（1687年）の「御検地水帳」には、「観音堂地十二歩」の記載が見られ、ここの堂地が古くからあったということが分かります。また、村の豪農で大庄屋も務めた村上多次兵衛が、昔からの観音堂地に堂社と鳥居を建て松や杉を植えて馬頭観音を祀ったという記録も残っています。

中野目の惣染宮は、平成2年に、地域の人達の手で300年祭が執り行われ、大掛かりな整備が行われました。

惣染宮の境内には、馬頭観音の大きな碑のほかに、江戸時代末期の庚申塔、あたりを圧するような巨大な「センの木（ハリギリ）」の古木があります。



中野目 惣染宮

智園寺

大字中野目にある智園寺（ちおんじ）は、「萬外山」の山号を持つ曹洞宗の寺院です。

智園寺が寺格を得たのは昭和24年のことで、その前は庵寺（寺院が僧侶の住居と兼用されている小さなお寺）でした。

この寺院の創立は、寛文6年（1666年）とも寛文3年（1663年）ともいわれますが、弘前の清安寺の住職をしていた萬外澤大和尚によって開かれたと伝えられ、当時は「寿外庵」と呼ばれていたようです。

開基の萬外澤大和尚については、明確な伝記が伝えられていませんが、雨乞いを行った様子や、人に生死を言い当てるなどの伝説的なエピソードが残っている人物です。

道路から寺院に至る通路の右手には、天明の飢饉で犠牲になった人々を弔って、中野目村と五林村で建立した供養塔があります。



中野目 智園寺と、参道の脇にある天明の飢饉の供養碑



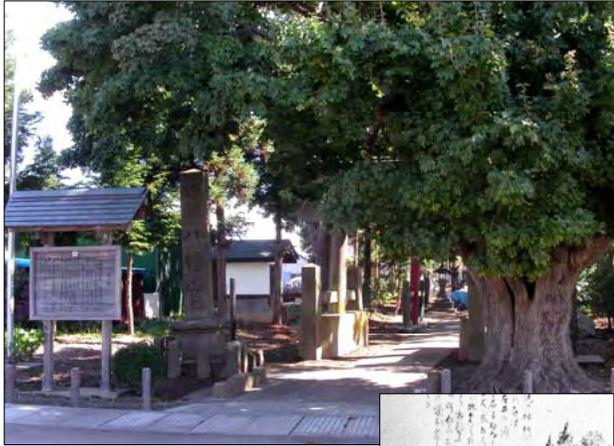
西中野目 八幡宮

大字西中野目に、八幡宮があります。

祀られている神様は、菅田別命（ほむたわけのみこと・応神天皇）です。

平安時代の

延暦年間(782～806年)に、蝦夷地に遠征



イタヤカエデの巨木が目立つ八幡宮の正面と、菅江真澄が残した「俵升山」と書かれた絵



した征夷大將軍の坂上田村麻呂が建立した108カ所の神社の一つだといわれています。

この神社はその昔、古館村・俵升村・中野目村の境にあって、正観音を祀り、付近の10の村の産土様として信仰されていました。その後、亀岡村に移転し、さらに江戸時代の寛文2年(1661年)に本殿・拝殿を現在地に建立して移転しました。また、宝永2年(1705年)には、吉田神道の傘下になって飛龍大権現を祀る「飛龍宮」となり、明治3年の神仏分離の際に「八幡宮」となっています。

神社の境内には、「強盗に襲われて難渋していたところ庚申様に助けられたので感謝の気持をこめて庚申の石塔を建てた…」という伝説を背負った庚申塔や、地域を代表する神社として建てられた戦争に関わる石碑、社頭には大きなイタヤカエデの古木などがあります。

また、江戸時代末期の寛政年間にこの地を訪れた菅江真澄は、「俵升山」と書かれた飛龍権現の祠があり、その前の堰にたくさんの石の柱を並べた橋が架けてあったと記し、こんな絵を残しています。

柏木堰 崇染宮

大字柏木堰にある崇染宮(そうぜんぐう)には、保食大神(うけもちおおかみ)と飛龍権現が祀られています。

この神社は、享保3年(1718年・江戸時代中期)に、柏木堰村・俵升村・

下俵升村の産土様として、馬頭観音を祀って創立されたと伝えられています。

崇染宮の神様は

思いやりの深い神様で、そ

の年の豊凶のお告げがあったり、水害から農産物を救ったり、境内の銀杏の大木にのぼり、高い枝から落ちた子どもを無傷で救ってくれたり…といった物語が伝えられています。

そのようなことから、安永5年(1771年)にお堂を新しく建て、神社の名前も「崇染宮」と改めたということです。

境内には、銀杏の大木や、馬頭観音、庚申塔、以前この地域が十川の氾濫の常習地帯でその犠牲者が多かったことから「スイコ様」(水虎様・河童の神様といわれ一派的には怖い異体の動物の石像ですが、ここのスイコ様は戦後に刻まれた石像で、亀に乗った観音様のような雰囲気です)、柏木堰出身の江戸相撲の力士・大ノ高純一の顕彰碑などがあります。



柏木堰 崇染宮のたたずまいと境内の大ノ高の顕彰碑



榊八幡宮

大字榊にある八幡宮には、品多和気命（ほんだわけのみこと・一般的に八幡宮に祀られている応神天皇）が祀られています。

この神社は、万治7年（万治は3年で改元されていることから次の年号の寛文4年－1664年－か）に、「榊村八幡堂」として村中でお堂を新築したという記録があり、さらに慶安元年（1648年）に新建され、神主は円太夫という人であったという記録が見られます。

その後時を経て明治6年（1873年）に矢沢の正八幡宮に合祀されましたが翌年には復社し、さらに翌年の明治8年に村社となりました。明治4年（1871年）には神殿が造られ、さらに明治43年（1910年）、皇太子時代の明治天皇が北海道と本県に行啓されたのを記念して玉垣が造られたといわれています。

拝殿には、野沢如洋の作ともいわれる「奔馬」の絵、境内には、神明宮・観音堂・稲荷宮などの5つの御堂、地藏堂、庚申塔、二十三夜塔、馬頭観音塔、江戸時代末の巡礼供養塔などがあります。



榊八幡宮

福田寺

大字若松の福田寺（ふくでんじ）は、「常盤山」の山号を持つ曹洞

宗の寺院です。本尊は釈迦牟尼仏ですが、さらに、文殊菩薩と普賢菩薩も祀られています。

元禄8年（1755年・江戸



若松 福田寺と門前に安置されている多くの石仏



戸時代中期) 上野国（こうずけのくに・現在の群馬県）から生方道沢（うぶかたどうたく）という坊さんがやってきて、常盤組・若松村の若松源之丞宅に身を寄せ、布教伝導に当たりました。やがて、この地に永住することを思い立ち、浄財を集めて草庵をむすんだのが、福田寺の始まりだといわれます。

後にその場所に常盤組出身の禅山和尚という坊さんが住むようになって「禅獄庵」と呼ばれるようになり、さらに明治14年（1881年）からは、今量雄和尚がこの庵寺に住み30年以上にわたって寺の護持に当たりました。そして、昭和34年に、「常盤山福田寺」の寺号を得て現在に至っています。

福田寺の前には、地藏堂、石像の観音様、六地藏などたくさんの石仏が安置されています。

若松八幡宮

大字若松にある八幡宮には、八幡神と山の神が祀られています。古い絵図によると、昔若松村は二カ所にあり、一カ所は現在の若松地域、もう一カ所は奥羽本線をはさんだ常盤の村落の西側にあたる所で、その場所に八幡宮がありました。以前ここから、門の礎石や古刀が出土したことがあり、八幡宮には御神体のほかに、釈迦牟尼・文殊菩薩なども祀られていました。その後八幡宮を移転させるに当たって、仏様は若松の禅獄庵（今の福田寺）に安置し、ご神体は榊村に遷座したということです。

そして昭和 17 年にはこの場所に馬頭観音碑が建てられ、昭和 29 年に、村中で弘前から「八幡神体」を入れて八幡宮のお堂を建て、それに「山の神」を合祀しました。さらに、若松八幡宮は平成 4 年に、それまでの字安田から字森越の現在地に移転しています。

境内には、紹介した馬頭観音碑、江戸時代末の 2 基の庚申塔があります。



若松八幡宮と、境内に並んでい
るの石塔

常盤八幡宮

大字常盤の常盤八幡宮には、誉田別命（ほむたわけのみこと・応神天皇）と気長足姫命（きながたらしひめのみこと）が祀られています。

常盤八幡宮の創立年などはよく分かりませんが、天和年間（江戸時代中期の初め）以後の古図

にこの神社が登場し、古い

伝統のある、この地方を代表する

神社であるということが出来ます。常盤八幡宮は、明治 6 年（1873 年）に村社になっています。

現在の拝殿は昭和 43 年に建てられましたが、この時本殿も修築され、遷宮祭が行われました。

また、常盤八幡宮の「年縄（としな・しめなわ）奉納行事」は町の民俗文化財に指定されています。そして、常盤地域の多くの神社の社頭には、常盤八幡宮と同じような見事な年縄が毎年飾られています。

常盤八幡宮の境内には、二十三夜塔や庚申塔、いろいろな石碑などがありますが、さらに昔若者たちが力自慢を競ったであろう「力試し石」が 2 基あります。



常盤八幡宮の年縄と、
境内の石塔

徳下八幡宮・イチイの古木

大字徳下（とくげ）にある徳下八幡宮には、誉田別命（ほむたわけのみこと・応神天皇）と天照皇太神（てんしょうこうたいじん）が祀られています。

徳下八幡堂は、承応2年（1653年・戸時代の初め）に村中によって造られたということですが、その後大破し、延宝4年（1676年）と貞享2年（1685年）に再建されたという古記録が見られます。そして、明治6年（1873年）に一旦常盤八幡宮に合祀されましたが、2年後の明治8年に復社し、その年に村社になっています。

徳下八幡宮の境内には、安政5年と明治5年の年号が二重に刻まれている庚申塔や、記念石碑などがあります。

また、正面の鳥居に近い境内には、有名な「イチイ（おんこ）の古木」があります。胴回りが2メートル以上あり、樹齢500年以上ともいわれる古木で、イチイを「村の木」に、そしてこの古木を「村指定文化財（天然記念物）」に指定しています。



徳下八幡宮の社頭と、境内にあるイチイの古木



福島 八坂神社

大字福島の八坂神社には、素盞鳴命（すさのおのみこと・古事記など我が国の草創にかかる神話に登場する神様、天照皇大神の弟で凶暴のため流され、やがて出雲の国で八岐大蛇・やまたのおろちを退治し三種の神器となる宝剣を得る）が祀られています。



福島の八坂神社と、境内に並んでいる多くの石塔



また同じ境内に、十川村千手観音堂や宇気母智（うけもち）大神のお堂などもあります。

この神社は、江戸時代初期の寛永年間に勧請されたという記録があり、相当古い神社ということになります。

また、寛文6年（1666年）に、津軽藩の藩士・古川仁左衛門が十川村領（福島）の田地開発を進め、その工事を完成させた時に、この地に「十川村千手観音堂」を建立し、千手観音を祀って土地の産土神としました。明治4年（1871）に神仏分離・廃仏毀釈の令が出

され、仏様であるその千手観音が廃されて「八坂神社」となったということです。

現在は、八坂神社と同じ境内に「千手観音堂」、八幡堂や庚申堂、宇気母智大神（うけもちおおかみ）などのお堂があり、さらに胸肩社、祇園大明神、千手観音、古川仁左衛門霊、明治45年の村鎮守250年祭などの記念碑、二十三夜塔、庚申塔といった多くの金石文があります。また、神社の近くには、福島の子の親である「古川仁左衛門の墓所」があります。



八坂神社と同じ境内にある宇気母智大神の社



八坂神社の近くにある、福島の子の親・古川仁左衛門の墓所

徳田村跡・稲荷旧神社旧跡碑



水田中に残る稲荷神社旧跡

時をしのばせてくれます。

福島には、徳田村という村がありました。徳田村がなくなったのは、明治時代の中期になってからということですが、村の象徴である「稲荷堂」（江戸時代中期の初め頃の寛文年間に創建）があったとされます。現在はライスセンターの前に案内板と石塔が、ライスセンター後方の水田の中に「稲荷旧神社旧跡碑」が残っており、往

十川端村跡・稲荷神社旧跡碑



十川端村の稲荷神社旧跡

福島の中菟のあたりに昔、十川端村があり、そこが福島の発祥の地ではないかといわれています。十川端村は、中世の終わり頃浪岡の北畠氏が編纂した「津軽郡中名字」にも記載されています。そして村の象徴として稲荷神社がありました。そして村がなくなった現在も用水堰に挟まれた堤防の上に「稲荷神社の碑」と松の木が残っており、大切にされています。

福島 本閻寺

大字福島の本閻寺は、「福島山」の山号を持つ、曹洞宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来・地藏菩薩です。

この寺院は、元禄時代の初期（1600年代の終り頃）に、村の信者たちが地藏堂を建てて拝んだのが始まりだと伝えられています。

その後、宝暦年代の中頃（1700年代の中頃）に、越中（富山県）の人で月松（げっしょう）という坊さんがこの地に住みついて村中を托鉢し、そのうちに村人とも打ち解けるようになりました。このことからこのお堂を「月松庵」と呼ぶようになり、やがて地藏堂を改築し、仏像や仏具を備えるようになりました。ただ、寛政11年（1799年）の村絵図では「無縁寺跡」となっているということです。

明治時代に入り、この庵寺に住む僧もなくなりましたが、やがて火災に遭い、本尊の阿弥陀如来だけが焼失を免れました。そして明治40年（1907年）頃、村中の寄進を受け、村の中程の場所から現在地に移転しました。

昭和29年に寺階登録が承認され、「福島山 本閻寺」となりましたが、その後、昭和58年に住職が他界されてからは無住になり、福島地区会が維持管理に当たっています。



福島の本閻寺

五輪盛



国道7号の旧道（羽州街道）から旧常盤村役場（現支所）の方へ入ると道端に案内板があり、その少し後方に「五輪盛」と呼ばれる場所があります。以前は、五輪塔と、高さが60センチメートルくらい・周囲が12メートルくらいの小盛が2つありました。

ここには昔から長慶天皇の陵墓だという伝説が伝えられていましたが、浪岡北畠氏の川原御所の変で討死した北畠具信父子の墓所ではないかといわれています。

水木 崇染社

大字水木の集落外れにある水木崇染社（そうぜんしゃ）は、溝城城主の溝城刑部正によって創建された神社とも伝えられ、また元禄の頃にはすでに神社があったとする識者もあります。現在、崇染社のお堂には、石碑が2基あるほかははっきりしないということです。



水木 崇染社

雄」と「大港藤助」の記念碑があります。

境内には、弘化3年（1864年）の庚申塔が1基、馬頭観音の塔、大正時代にこの地で活躍した2人の相撲の名手「鬼嵐武

光明寺

大字水木にある光明寺は、溝城山の山号を持つ寺院です。本尊として、右に観世音菩薩、左に阿弥陀如来、そして地藏尊を祀っています。

光明寺の前身の寺院は、元禄元年（1688年）に建立されたという伝承がありますが、詳しい記録などはありません。ただ、境内の墓石の中には、この地方としては非常に古い元禄4年という年号が刻まれているものがあります。

この時代の寺の宗旨や墓守などについても不詳ですが、その後村中で相談しこの庵を「禅心庵（ぜんしんあん）」と呼ぶようになり、それが後に「光明庵（こうみょうあん）」と改められたといわれます。

「光明庵」は昭和15年以降、数回にわたってお堂の改築や寺地の拡張が村中の負担で進められ、やがて墓守が置かれました。そして、昭和42年に「溝城山 光明寺」として、寺階台帳に登録されています。



光明寺と境内にある元禄の年号が読める墓石



水木 八幡宮

大字水木にある水木八幡宮は、誉田別命（ほむたわけのみこと・応神天皇）を祀っています。

水木八幡宮は、浪岡の北畠氏の縁者である溝城（みぞき）城の城主の溝城刑部正（みぞききょうぶのしょう）によって創建された神社だと伝えられ、八幡宮はこの地に溝城城があった中世の終わり頃には創建されていたとされます。

また、明治29年（1896年）頃まで、神社の敷地の一部に小学校があった時期があり、「明治16年（1883年）、神社の境内に3間半に9間の校舎が建てられた…」という記録が残っています。

八幡宮の境内には、幕末の年号が刻まれた“巨大な自然石”や、三猿（みざる・いわざる・きかざるの三猿）が刻まれている明治29年の庚申塔、安政4年（1857年）の百万遍塔など6基の石塔、佐藤伴蔵氏の碑などがあります。



水木 八幡宮

水木 熊野宮

大字水木字古館にある熊野宮には、伊弉諾命（いざなぎのみこと）・伊弉冉命（いざなみのみこと）そして誉田別命（ほむたわけのみこと）が祀られています。

水木熊野宮は、中世の時代、この地に築かれた浪岡・北畠氏の主要な拠点である溝城城（水木城）の館神（守り神様）として創建され、永正17年（1520年）、恵心僧都という徳の高い坊さんによって勧請されたと伝えられています。

境内には、社殿や一般の神社にある御神燈や狛犬（こまいぬ）などのほかに、大きな熊の石像が一對あり、さらに正面の左右の大鳥居には人の顔を思わせるような雰囲気のある昇り龍と降り龍が刻まれているのが、印象的でした。境内にはそのほかに、大きな自然石（力試石か）、庚申塔などもあります。

神社の道路端には、水木城の案内板があり、神社に向かって右側の少し低くなっている細長いが所が、水木城の堀の跡であるということです。



水木熊野宮と、鳥居の昇り龍、狛犬と並ぶ熊の石像

水木城址

中世の頃、浪岡城を本拠地として栄えた北畠氏は、北畠顕家（あきいえ）系統で宗家である「浪岡御所」と、北畠顕信（あきのぶ）系統の「川原御所」に別れ、時には対立関係にあったり、内紛を起こしたりしていました。その「川原御所」である溝城具信の所領地の要の場所にある城・館が、溝城館・水木城です。

水木城は、その頃岩木山麓の賀田や堀越城で急激に勢力を拡大している大浦氏に対抗する北畠氏の最前線の基地でもあったようです。

永禄5年（1562年）に、北畠一族の内紛である「川原御所の反乱」がおこり、溝城館・水木城は浪岡御所の軍勢に攻められ落城したといわれます。溝城氏はその後、津軽為信に仕え、水木氏を名乗ることになり、文禄2年（1596年）から、「溝城」が「水木」と改められたということです。

低地にある現在の熊野宮付近には館の堀の跡がしのげられ、館は後方の少し高い畑地の辺りだということです。水木城址は、平成4年から3年にわたって、「水木館遺跡」として県の手で発掘調査が行われています。



溝城（水木）城址の案内板と、城の堀の跡、左側の樹木は熊野宮

福左内 淡嶋神社

大字水木字福西・福左内の淡嶋神社には、医薬や医学の神様である少彦名命（すくなびこなのみこと）が祀られています。

淡嶋神社の発端については、「永正 17 年（1520 年）に水木（溝城）城主であった溝城刑部の家臣である水木村の今市右衛門が、薬師堂として勧請したという古記録があります。今市衛門と今次右衛門の二人が、主君の命により用水堰を開削した時に、土の中から薬師如来の木像を発見し、それを祀ったという内容です。それに、延宝 3 年（1675 年）に、菊理姫命（くくりひめのみこと）が合祀されたのですが、明治 4 年（1871 年）の廃仏毀釈の令によって仏体の薬師如来が廃され、菊理姫命だけを祭るようになったそうです。

その後、明治 20 年頃に火災で社殿を焼失し、明治 33 年（1900 年）から、現在の少彦名命を祀るようになったということです。

神社の境内には、幕末頃の庚申塔が 3 基と、薬師堂があります。



福左内の淡嶋神社
と
境内の石塔

久井名館 稲荷神社

大字久井名館（ぐいなだて）の稲荷神社には、一般的に稲荷神社に祀られている、宇賀魂命（うがのみたまのみこと）が祀られています。

神社の由緒などはよく分からないということですが、万治年間（1658～61 年）に、村中の手で再建されたという記録が残っています。

また、昭和 61 年に発行された「常盤村文化財資料 I 神社・仏閣編」には「この稲荷神社の脇の馬が入っているお堂の中に竜神様の木彫 2 体とその由緒の書付がある」と記されています。

久井名館の稲荷神社は、十川の川岸にひっそりと納まっています。十川は改修される最近まで、毎年のように氾濫が続き、地域の人達は大変難儀をしていたということです。

神社の向い側には正法庵がありますが、稲荷神社とともに、付近は村の人達の祈りの場所…という雰囲気が漂っていました。



久井名館 稲荷神社

久井名館 正法庵

大字久井名館の正法庵は、釈迦如来の坐像を祀る庵寺で、境内には2体の羅漢象を祀る堂があります。

正法庵は、開基や開山といった歴史を刻んだ寺院ではなく、由緒も不明です。元禄時代に正法庵をむすんだ…という説もありますが、定かではありません。昔から村人たちが集まり、極楽浄土を求めて懺悔し説教を受ける、心の寄り所として寄り合った場所、そんな説教道場が、正法庵の前身のようです。

初めに庵主として説教をした人は藤田という人で、この人は明治16年(1883年)頃に他界しましたが、その後、何人かの庵主が護持に当たりました。昭和39年からは、新貝省道氏が庵主を務め、村内の仏事に深くかかわり親しまれましたが、平成13年に新貝和尚が他界した後は無住となり、地区で庵の護持に当たっています。

正法庵の脇持として安置されている二体の羅漢仏は、明治初年の廃仏毀釈の時に打ち捨てられていたものをここに安置したのだといわれ、文化財に指定されています。

また、門前には、庚申塔(猿田彦大神)、二十三夜塔、百万遍塔、馬頭観音の碑などが並んでいます。



正法庵と門前の石塔

富柳 正八幡宮

大字富柳の正八幡宮には、誉田別命(ほむたわけのみこと)が祀られています。

この神社は、寛文元年(1661年・江戸時代中期の初め頃)に、弘寛法印(こうかんほういん)という人によって勧請されたという伝承があり、また寛文12年(1672年)に御派立頭(おんはだちがしら)の戸田七郎兵衛という人がお堂を建立したのが始まりだとも伝えられています。また「貞享の検地」が進められようとしている天和4年(1684年=貞享元年)の書上帳には「八幡宮あり」と記されています。

正八幡宮の境内には、青面金剛の庚申様と思われる石仏などがひっそりとありました。



富柳の正八幡宮と
境内の石仏



福館 稲荷神社

大字福館にある稲荷神社には、宇賀魂命（うがのみたまのみこと）が祀られています。

福館の稲荷神社は、延宝3年（1675年・江戸時代の中期の初め頃）に、福館村の一戸弥五左衛門という人が、産土様（うぶすなさま）のお宮として建てたのが始まりだと伝えられています。

その昔、神社から西方約30丁（約3270m・1丁は60間＝約109m）の所に「館」があり、北畠氏の一族が守り住んでいましたが、この神社は、その古館の守護神だということです。次のような物語です。

一戸弥五左衛門らがこの村の田地を開墾した時、一人のおじいさんが現れ、持っていた杖で「ここが良い土地だ」と導いてくれました。そして「私は館の神様である」と告げたということです。そのことから一戸弥五左衛門が延宝3年にその神様を祀るお堂を建て、皆で崇敬するようになったということです。

稲荷神社の境内には、幕末と明治の「庚申塔」などがあります。



福館 稲荷神社

いろいろな祈りの場所など

以上、神社や寺院、郷土の史跡として一般に知られているところを紹介しました。“史跡”といえるのかどうかは別にして、私たちの郷土には昔から大切にしてきた祈りの場所やおかしてはならない思いが宿る不思議な場所がたくさんあります。

そんな場所の中から比較的面積の大きい目立つ場所を訪ねてみることにします。

白子の庚申



白鳥飛来地の方から白子に入る集落の入口に、庚申（猿田彦大神）を祀る祈りの場所があります。

林崎の馬頭観音



林崎の集落の板柳よりの外れに鳥居のある馬頭観音を祀っている祈りの場所があります。

林崎の庚申



林崎の集落の国道を挟んだ東側の中野目や水沼の方に通じる農道の入口に、庚申を祀るしつとりとした祈りの場所があります。

矢沢の馬頭観音



矢沢のバイパス側の入口近くに馬頭観音を祀る場所があります。

江戸時代には、このあた

りに、一里塚があったともいわれています。

中野目 天岩戸櫻谷神社



大字中野目の裏通り（昔は本通り）に、天岩戸櫻谷神社という、地域の祈りの場所があります。小さなお堂と、天岩戸櫻谷

神社と天照大神の碑、江戸時代には大庄屋などを務めた中野目の村上家を顕彰した碑などがあります。

俵舛 庚申と百万遍



大字俵舛の十字路に、巨大な庚申塔と百万遍塔があります。巨大な庚申は、江戸時代に遠方の村の人達が

庚申塔を作るための石材をやっとこの地まで運んできたところ、ここからはどうしても動かせなくなってしまい、とうとうここに庚申塔を建てることにしたという伝説が残されています。

三ツ屋の庚申塚と百万遍



三ツ屋の村外れに、小さな区画があり、庚申塚と百万遍塔が安置されています。道路改修などによってこの地に移転したものだそうです。

ぴらじょう

富柳正八幡宮の近くに、昔から「ぴらじょう」と呼ばれている場所があります。一帯は湿地帯に台地が点在し、中世の土器の土師器（はじき）や須恵器（すえき）の破片が出土しました。

中世の頃、住居や大切な耕作地があったのではないかと、また、このあたりに「館」があったとも伝えられています。



ぴらじょう 右手奥に見える松があるあたり、手前の道路端に

中目座の馬頭観音



福館の稲荷神社の少し北側、中目座の地に馬頭観音があります。鳥居があり、馬頭観音などの石碑や地藏堂、西国三十三箇所・四国八十八箇所の「巡拝石塔」などがあります。

いざなな金石文

郷土には、たくさんの民間信仰の石塔や、供養碑、顕彰碑、記念碑、石碑などの金石文があります。

「庚申」…中国の暦に「十干・十二支」があり、十干（甲・乙・丙・丁…）と十二支（子・丑・寅・卯・辰…）の組み合わせによって昔の日本の暦は編成されているのですが、庚申（かのえさる）の日や年に祈りを込めて石仏を刻んだり祈りを捧げたりする民間の信仰が広まり、その石碑が庚申塔です。庚申塔は大別して「庚申」という文字が刻まれているもの、神道で庚申の神様にあてている「猿田彦大神」という文字が刻まれているもの、青面金剛という仏像が刻まれているものの3種類があります。庚申塔の多くは神社にありますが、元来は村の道端などにあったものであり、今でも道端にたく

さんの庚申塔があります。現在藤崎町で一番多い石塔がこの庚申塔で、祈りの行事のやり方なども伝えられています。

「百万遍塔」・・「百万遍」という文字が刻まれており、大抵は集落の出入り口にあります。中には、隣の村の百万遍と自分の村の百万遍が並んで立っている所もあります。彼岸になると、カーン・カーン・カンカンと鉦を鳴らしながら人々が村を練り歩き、辻々で大きな数珠を練り回し、村に悪いことや病気などが入ってこないようにと祈る風習が今も続けられています。その石碑が百万遍塔です。道端に立っていますので、今は使われていなくても昔の道路がそこにあったということを知ることができます。また道路改修などで百万遍塔を移す場所がなくなり、歩道と車道を区分する縁石の上にとチョココンと立てられている石塔もあります。近年は村の神社に移されている百万遍塔がかなり多いようです。

「観音塔」・・観音様を彫った石塔で、多いのが「馬頭観音塔」です。観音様は普通優しいお顔をしているのですが、馬頭観音だけは恐ろしい怒りのお顔をしています。馬頭観音は馬とは直接関係がないといわれるのですが、“馬の頭の形をした冠”をかぶっていることから馬頭観音といわれ、農業の必需品が馬であることから、馬頭観音を農業の神様として、保食神社や崇染の神社に祀っていることが多いようです。また、ちゃんとした神社とはいえないまでも、馬の石像や鳥居などを建てて馬頭観音として祈りの場所としている所もあります。「馬頭観音」という文字を刻んだ石塔が多いようですが、馬の形をした冠をかぶった怒りの形相の観音様の石像もあります。なかには馬頭観音とはいえませんが、神社などにただ「うま」という文字や馬の絵を刻んだ石が立てられているのもよく目にします。ともに働いた馬に対する思いが込められていることと思います。

また、馬頭観音でない観音様の石像や文字を刻んだ石塔もよくあります。

「二十三夜塔」・・月のめぐりで作る暦・太陰暦の二十三日のお月様「二十三夜」の月は、下弦の月で深夜になってから上がってきます。そんなところに風情のある雲などがかかると、お月様の舟に神様が乗ってお出でになった・・という話題が出たりします。昔から二十三

夜のお月様を特別なものとし祈りを込めるようになりました。その祈りの塔が二十三塔で、津軽地方には多くありますが、全国的には少ないということでした。

「地蔵」・・子どもが亡くなったりすると、救われようのない悲しみを託した地蔵様が建てられました。共同墓地や道端に数多くの地蔵様があります。種類もいろいろで、たくさんの地蔵様が並んでいる地蔵堂、1・2体の地蔵様がきれいな衣装をきて化粧され納められている地蔵堂、露天に一体で立っている地蔵様・三地蔵・六地蔵など様々です。

また、記念碑・顕彰碑・供養碑なども数多くあります。そのような人々の思いがこもる、石仏、石碑類などを大切にしたいと思います。

ふるさとの史跡散歩

藤 崎 町

.....

発 行 日	平成19年2月10日
発 行	藤崎町郷土史会
編 集	小笠原 睦男
	青森県南津軽郡藤崎町
	大字藤崎字村岡 15-4
	(藤崎町郷土史会代表)